修士論文（要旨）
2011 年 1 月

倒置質問文に見られる韓国人学習者の日本語イントネーション

―その特徴と指導方法―

指導　青山文啓　教授

国際学研究科
言語教育専攻
208J4005
姜珠英

目次

1 章　はじめに
1.1　研究背景および目的---------- 1
1.2　本論文に出てくる主要用語の説明---------- 3
1.3　倒置文の定義---------- 4
1.4　日韓両言語における倒置質問文イントネーションの特徴---------- 5

2 章　研究方法
2.1　調査概要---------- 9
2.2　調査の手順---------- 11
2.3　調査協力者の背景---------- 12
2.4　調査シートについて---------- 12

3 章　倒置質問文イントネーションの特徴―韓国人学習者 9 名を対象に―
3.1　日本語の倒置断定文---------- 16
3.2　韓国語の倒置断定文---------- 17
3.3　日本語の倒置質問文---------- 18
3.4　韓国語の倒置質問文---------- 24

4 章　プロソディーグラフを用いたイントネーション指導の効果
4.1　指導の目標と概要---------- 29
4.2　プロソディーグラフの特長と指導の過程および結果---------- 31
4.3　結果のまとめと今後の課題---------- 35

5 章　研究の分析結果
5.1　本論文のまとめ，および応用性---------- 36
5.2　今後の課題と展望---------- 38

【参考文献一覧】

要旨

日常会話でよく使われる「食べる？これ」は倒置質問文と呼ばれる。倒置質問文とは，文の最初に質問文形式の述語がきて，その後に主語や補語が続く形式の質問文を指す。日本語と同様，韓国語にも倒置質問文は存在し，使われ方も一見同じように見える。しかし，イントネーションという面では日本語と韓国語は全く異なり，韓国語母語話者が日本語の倒置質問文を発話する際に，韓国語のイントネーションで発話してしまうと，「聞き手を非難するような言い方」や「聞き手の行動に強い疑問を持つような言い方」として伝わる可能性が非常に高くなってしまう。

具体的に日韓両言語の倒置質問文のイントネーションパタンを見てみると，両言語とも3つのパタンが現れ得ることが分かった。この3つのパタンとは「上・下」「上・上」「下・上」である。「上・下」とは，倒置質問文の前方に位置する述語だけを上昇させる方法，つまり「食べる？これ」のパタンであり，「上・上」は前方の述語と後方の主語または補語を両方とも上昇させる方法で「食べる？これ？」のパタン，「下・上」は後方に位置する主語や補語だけを上昇させる方法で「食べる，これ？」のパタンである。

韓国語ではこの3つのパタンがすべて一般的な倒置質問文としてよく使われ，どれも意味に大きな変わりはない。ところが，日本語では「食べる？これ」以外のパタンを使うと，上で説明したように聞き手を非難するような言い方になってしまうことが，学習者にとっての問題である。もし韓国人学習者が日本語の倒置質問文を発話する際，韓国語のイントネーションルールを適用したとしよう。「食べる？これ」と発話すべきところを「食べる？これ？」や「食べる，これ？」と発話すれば，日本語母語話者とのコミュニケーションに大きな障害が生じることは間違いない。

本論文では，上記の調査で得た結果をもとに，韓国人学習者の倒置質問文イントネーションの指導法についても考察を試みた。対象となった者は倒置質問文のイントネーションで特に誤用が多く見られた学習者3名である。指導は一ヶ月間，週に1回，計4回の4時間行った。その結果，学習者全員が4時間で「正用」のイントネーションパタンを完全に習得できた。その大きな理由は，プロソディーグラフという音声を視覚化したグラフを利用したことが挙げられる。指導の前，学習者全員が倒置質問文のイントネーションについて「どこでどのぐらい上げれば正しい使い方になるか，実感がわかない」などと発言していた。しかし，毎回の指導で直接プロソディーグラフを作成することによって「正用と誤用の違いが分かり，だんだん発音できるようになった。最終の授業では正用のパタンが自由に使えるようになった」と言っている。この過程の中で，学習者は「認識」→「運用」→「自由に駆使」という3段階を経て学習していくことが分かった。これは，指導する側も段階的な目標を立てて指導する必要があることを示している。

最後に，今回の調査では導入をしなかったが，より効果的な指導方法として，学習者に母語である韓国語の倒置質問文のパタンを先に認識させ，次に日本語の倒置質問文のパタンを教えることも日韓両言語の類似度から言えば，効果があるだろう。

【参考文献】

鮎澤孝子・谷口聡人（1991）「日本語音声の韻律的特徴」『日本語の韻律に見られる母語の干渉―音響音声学的対照研究』(文部省重点領域研究『日本語学』D1 班 平成 2 年研究成果報告書) pp.1-24.

鮎澤孝子（1992）「日本語の疑問文の韻律的特徴」『日本語の韻律に見られる母語の干渉（2）―音響音声学的対照研究―』(同上) pp.1-20.

宇都木昭（2005）「朝鮮語ソウル方言におけるアクセント句のディフレージングについて」『筑波一般言語学研究会』pp.1-11.

宇都木昭（2004）「朝鮮語ソウル方言における統語的曖昧文と F0 の下降現象」『言語情報学研究報告』4, pp.291-299.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典』第 6 巻 術語編 三省堂.

川上秦（1975）『日本語アクセント法』学書房出版.

――――(1995)『日本語アクセント論集』汲古書院.

河野俊之・串田真知子・築地伸美・松崎寛(2004) 『1 日 10 分の発音練習』くろしお出版.

窪薗晴夫（1998）『音声学・音韻論』くろしお出版.

国語学会（編）（1988）『国語学大辞典』第 10 版，東京堂出版.

田中春美（編）（1997）『現代言語学辞典』第 5 版，成美堂.

土岐哲（1989）『講座日本語と日本語教育第 13 巻日本語教育教授法（上）』明治書院.

土岐哲・金秀芝（1997）「韓国語話者による日本語倒置質問文のイントネーション―上昇の形式とその習得パタンをめぐって―」『阪大日本語研究』9 pp.17-35.

戸田貴子（2008）『日本語教育と音声』くろしお出版.

日本語教育学会（編）（1995）『日本語教育事典』第 9 版.

前川喜久雄（1997）「日本語疑問詞疑問文のイントネーション」音声文法研究会（編）『文法と音声』くろしお出版.

松崎寛（1999）「韓国語話者の日本語音声:音声教育研究の観点から」『音声教育』3, pp.26-35.

――――(1995)「日本語音声教育におけるプロソディーの表示法とその学習効果」『東北大学文学部日本語学科論集』5，pp85-96.

閔光準（1993）「日韓両言語の韻律的特徴に関する音響音声学的対照研究（1）―説明疑問文と判定疑問文のイントネーションを中心に―」『教育論叢』13，pp.13-21.

閔光準（1993）「韓国語疑問文イントネーションの音響音声学的分析と合成音声による知覚実験―日本語との対照研究のための基礎的資料として―」『語学』20 pp.13-26.

閔光準(2007)「韓国語ソウル方言のイントネーション」『音声研究』11：2，pp.16-27.

민광준（1998）「한국어 의문사 의문문과 예-아니오 의문문의 의미 구별에 관여하는 음향 자질」『음성과학』제 4 권 제 1 호.

전용선(2007)『한국어의 모든것』 도서출판 언어논리.

한재영 외(2008)『한국어 문법교육―Teaching Korean Grammer』 태학사.

박영순(2004)『한국어 의미론』고려대학교 출판부.

Martin, Samuel E. (1992) *A Reference Grammar of Korean.* Singapore Tuttle.